

# 津軽氏とキリシタン——津軽為信の キリスト教への接近 (2)

木 鎌 耕 一 郎

## 目次

はじめに (前号の要旨)

### 7. キリスト教接近の「契機」

- (1) 問題の記述
- (2) 1591 年前後の為信の動向
- (3) 高山右近との接触の可能性
- (4) 取り持ち役としての右近
- (5) ヴィセンテ修道士との接点
- (6) 名護屋における為信と右近の接点
- (7) 伏見における為信と右近の接点

おわりに

引用・参考文献一覧

## はじめに (前号の要旨)

はじめに前号の要旨をふりかえり、本号で検討する内容とのつながりを示しておきたい。青森県とキリシタンとの関わりには二つの局面がある。ひとつは津軽藩を築いた津軽為信とその息子信建と信牧が、京都、大坂でキリスト教に触れ、為信は受洗に至らなかったが二人の息子が受洗したことである。もうひとつは徳川家康の禁教令により、関西の士族信者が津軽に流刑となったことである。数人のイエズス会士が流刑者を司牧するために津軽に潜入したことや、流刑者と彼らに感化された人々の中に殉教者が出たことが知られている。本研究は、このふたつの局面のうち、前者に焦点を当て、なかでも津軽為信がキリスト教に接近することになった「契機」と「動機」を中心に考察する。為信は

主体的にキリスト教へ近づいたとされるが、その行為に至るには、何らかの外的な「契機」があり、また背後には何らかの内的な「動機」が存在したことが推察されるからである (1～2 章)。

津軽為信は津軽藩の初代領主である。彼は戦国末期、南部氏の家督争いの混乱時に、津軽地方を配下において藩を築き、秀吉政権、後に家康政権の主従関係に組み込まれた (3 章)。1596 (慶長元) 年のイエズス会年報では、為信は大坂で修道士から信仰の手ほどきを受け、説教を聞き、洗礼を望んでいたとされる。しかし彼は、十一歳になる三男信牧に洗礼を受けさせたものの、自らは受洗しなかった。また 1607 (慶長 12) 年のイエズス会年報では、長男信建が自ら司祭を訪ね受洗した後に死を迎えたことが伝えられている。このことから津軽氏父子をキリシタン大名に数える文献が散見される (4 章)。

---

八戸学院大学人間健康学部教授

前号では、主要な先行研究を概観し、為信のキリスト教接近の「契機」「動機」についてさらなる検証を要する二つの点が浮かび上がった(5章)。ひとつは、高木一雄『東北のキリシタン殉教地をゆく』の中で指摘された為信がキリスト教に接近した「動機」である。同書では、為信が南部氏をめぐる「怨霊」に悩まされていたことを「動機」として挙げている。為信が、南部氏を出自としながら、家督争いの混乱に乗じて津軽の領主に君臨したことは事実であり、南部氏が津軽氏に対して厳しい目を向けていたことはよく知られている。そこで、どのような意味で南部氏の「怨霊」が為信のキリスト教接近の「動機」となったかについて、当時の現世利益的宗教観に着目して検証した(6章)。

先行研究の検証を通して浮かび上がったもうひとつの検討事項は、「契機」に関するものである。石戸谷正司「津軽諸侯とキリシタン」は、1590(天正18)年に来日したイエズス会日本巡察師ヴァリニャーノが、インド副王の使節として天正遣欧少年使節を伴い、都で秀吉と謁見したことを報告するフロイスによる1591年度の年報の記述に、高山右近を通じて説教を聴くことを求めた二人の人物がおり、そのうちの一人が「奥州の国の大名」とされていることを指摘し、この人物が津軽為信である可能性を示唆した。もしこの人物が津軽為信であれば、為信のキリスト教接近の契機に、これまで繋がりが見出されなかった高山右近の存在が浮かび上がってくる。津軽氏とキリシタンの関わりについてイエズス会年報が伝える情報源として、従来は上記の1596年と1607年の年報に依拠してきた。しかし1591年度の年報における「奥州の国の大名」が為信について言及されたものであるとすれば、津軽為信のキリスト教接近の「契機」を理解する新しい情報源として注目に値する。本号(7章)では、この仮説について検証する。

## 7. キリスト教接近の「契機」

石戸谷正司「津軽諸侯とキリシタン」では、1592年10月1日付でフロイスがイエズス会総長宛てに発信した日本年報の中に、高山右近を介してキリスト教への入信を願うようになった大名が二人いることが紹介され、そのうちの一人である「奥州」の大侯が、津軽為信である可能性が示唆された。同論文では記事の紹介にとどまり論究はなされていない。しかしこの人物が為信であった場合、為信のキリスト教接近の「契機」を知る重要な手がかりになる。本章では、フロイスによる問題の記述が、為信について語ったものである可能性について、同時代に生きたキリシタン高山右近、巡察師ヴァリニャーノ、ヴィセンテ修道士との時間的空間的な接点をもとに考察する。

### (1) 問題の記述

フロイスによるこの報告は、巡察師ヴァリニャーノが来日し、インド副王の使節として秀吉に謁見するために都へ赴いた文脈にある。使節団は、ヴァリニャーノと帰国した天正遣欧少年使節四名を含む約三十名で構成され、インド副王の贈物と書状を携えていた。ヴァリニャーノ一行は、1590年の年末に長崎を出発し、翌年2月に都に到着している。一行は、秀吉との謁見に成功したが、秀吉が尾張に向向いてからもしばらく都に滞在し、その間に多くの諸侯がヴァリニャーノを訪問したとされる。ヴァリニャーノらは、秀吉との謁見では布教への影響を警戒し、伴天連追放令の話題を避け、インド副王使節としての立場を貫いたとされる<sup>1)</sup>。問

<sup>1)</sup> 「(関白殿)は当初から、使節がこの(追放令解除の)問題を話題に持ち出すことを断じて罷りならぬと言っていたので、キリシタンの諸侯は、(使節が)その話をすれば、益するどころか、(殿を)憤激させる結果になると考えていた。そこで(巡察)師は、この問題についてはいっさい触れず、関白自身が心の中でどう決心したか、口外するまで待つことにした。」(上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第1期第2巻』

題の記述は、この間の都での出来事として描かれている。まず、その記述を確認しておこう<sup>2)</sup>。

ある諸侯は、密かに教理の講義を聞いたが、その中には関白殿とも親しい三カ国の領主でもある前田又左衛門の嫡子（利長）もいた。この若者は（高山）ジュスト（右近）殿の父ダリオと近づきになっている。クリシタン宗門の柱石である彼ら（ジュストやダリオ）の努力によって、前田又左衛門（の嫡子）は、クリシタン宗門に関心を抱きはじめ、デウスの御言葉を聞いて、我らの宗門に入ろうと明らかに希望するほどになった。しかし彼は、関白殿の政庁の重要な人物であり、またこのことが公になったら、そのことで（ダリオとジュスト右近殿の身の上に）大きな変動をもたらす危険も恐れられたので、洗礼を受けることはより適した時期まで延ばすことにした。しかし彼は、自ら挨拶のために（巡察）師を訪ねて弟子になることを願った。奥州の国の大名も同様に訪れ、（高山）右近殿を通じて我らの説教を聞くことを望むようになったが、彼も既述の理由から受洗を先に延ばした。より身分の低い貴人たちも聴聞し、（彼らは）受洗した。このようにもし自由に説教を聞くことができるならば、大勢のクリシタンが生まれたことであろう。だがそれは非常な危険をもたらし得ることで、きわめて慎重に振舞う必要があった。<sup>3)</sup>

この記述は、フロイスがイエズス会日本年報

のために記したものであるが、ほぼ同じ記述が『日本史』のなかにも登場する。全体を通してイエズス会日本年報よりも、それを補足する形で記された『日本史』の方が細部に詳しいため<sup>4)</sup>、上記引用部分に関してもいくつかの補足情報を得ることができる。すなわち、前田又左衛門の嫡子利長は「すでに一カ国（越中）を統べ」、右近の父ダリオを「召し抱えて」おり、右近自身は「前田又左衛門に仕えていた」こと、また利長は「教えを実によく理解したので、なんとしてもクリシタンになる決心でいた」こと、さらに、奥州の国の大名は「きわめて強力な」大名と修飾され、「ヴィセンテ修道士が彼らに説教し、彼はよく理解し、（巡察）師を訪問した」こと、である<sup>5)</sup>。

訳書『日本史』の注では、「奥州の大名」について「不詳」とされ、伊達政宗の可能性のみ

<sup>4)</sup> イエズス会の日本年報は、諸種の混乱を避け、各地の会員や世間に出版を通して公開するために、報告者（その多くにフロイスが携わっている）の記述が上長により是正や削除が施されたが、現在邦訳されている同朋社出版の訳書もその公開版を原本としている。日本年報のこのような方針を制度化したのは他ならぬヴァリニャーノであり、並外れた文才により詳述を好んだフロイスの報告書も修正を施されたという。イエズス会日本年報のテキストに関しては上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第Ⅰ期第1巻』の松田毅一による「解題」（vii-xxiv 頁）に詳しい。他方、『日本史』は1583（天正11）年秋に日本副管区長ガスバル・コエリョから編述を命じられたフロイスが、心血を注いだ書である。フロイスはこれまでの年報をもとに、自身の見聞や経験を総動員して本書をまとめた。1593年にマカオにおいて、フロイスは『日本史』の推敲をしつつ、ヴァリニャーノからより短く纏めるよう求められたが、原形のままで本書が刊行されることを熱望していた。その願いは存命中にかなわなかったが、『日本史』の写本がそれまでの年報を補足したものであるため、年報よりも細部に詳しい情報が盛り込まれている。『日本史』の執筆経緯については、ルイス・フロイス著 松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史Ⅰ 将軍義輝の最期および自由都市堺 織田信長篇Ⅰ』中央公論社2010年の巻末「ルイス・フロイス略伝」及び「日本史の構成と写本」（321-329 頁）に詳しい。

<sup>5)</sup> 上掲『日本史Ⅴ 五畿内篇Ⅲ』（284-285 頁）

（232-233 頁）なお本号の注では前号に示した文献については「上掲」と表記した。）

<sup>2)</sup> 石戸谷氏の論文では、フロイス年報の記述を『木下空太郎全集』（第六巻 230 頁）の訳から引用している。木下空太郎は『ルイス・フロイス日本書翰』（第一書房 1931 年）で、1591 年、1592 年度のフロイスによる日本年報を翻訳している。

<sup>3)</sup> 上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第Ⅰ期第1巻』（234 頁）

否定されている<sup>6)</sup>。さて、この「奥州の大名」が津軽為信であるという仮説をどのように検証すべきであろうか。矛盾する史実が確認できれば仮説は誤りであるし、仮説が正しいことを支持する何らかの情報が見出せれば、蓋然性を高めることになろう。そこで、① 為信がこの時期に巡察使ヴァリニャーノを都で訪問した可能性、② この時期までの為信と高山右近の接触の可能性、③ 為信が大坂で説教を受けたヴィセンテ修道士との接触の可能性、④ 問題の記述から為信のキリスト教接近と信牧の受洗について報告された1596年に至る約五年間における為信と右近の接点、について検証しよう。

## (2) 1591年前後の為信の動向

インド副王の使節としてヴァリニャーノ一行は、1590年末に長崎を出発し、1591年の1月から2月半ば頃に播磨室津(兵庫県)に滞在後、大坂に上陸し、2月19日から21日まで三日間滞在した。2月23日には鳥羽に向かい、そこから翌24日に盛装して行列を整え、都に向かった。使節団一行は、3月3日(和暦1月8日)に、秀吉から届けられた馬や駕籠に乗って聚楽亭に登城し、謁見に臨んでいる<sup>7)</sup>。その日は諸種の儀礼や宴会が行われ、翌日もロドゥリーゲス修道士や伊藤マンショが秀吉に召喚されている。秀吉はその翌日、すなわち3月5日に尾張に出向いたが、その後二十二日間、ヴァリニャーノ

は都に滞在し、その間に多くの諸侯がこの巡察師を訪ねてきた。離京したのは、3月25日である。

このようにヴァリニャーノは、1591年2月19日(和暦天正19年1月26日)に大坂に上陸して三日間滞在し、2月24日(和暦閏月1月1日)から3月25日(和暦2月1日)までの間、都にいた。では、この間の為信の動向はどうであったか。

前述のように、天正18(1590)年に津軽仕置が行なわれた。秀吉の命を受けて津軽領の検地にあたったのは、高山右近を召し抱えていた前田利家であった。検地は、同年9月下旬から10月上旬頃までに終了し、為信は前田利家の家臣とともに都に上っている。その日付は10月10日ころと推定されている<sup>8)</sup>。これは大名の参勤を含む「足弱衆の上洛」で、領地を安堵された大名に対して、妻子を人質として京都の屋敷に住まわせる豊臣政権の政策であった。為信らは12月には入洛した<sup>9)</sup>。この上洛からいつ津軽へ帰着したかは不明であるが、同年6月20日頃から九戸一揆への鎮圧に向けた動きが活発化していることから、6月頃には既に為信は津軽に居たものと推察される<sup>10)</sup>。

<sup>8)</sup> 日付については、前号の注16)(紀要20頁)を参照。

<sup>9)</sup> 前田利家の家臣河島重統による12月29日の書状に、津軽仕置後の為信とその「足弱衆」の上洛が伝えられ、河島自身は12月5日に上洛したことが記されている。「南部右京亮并足弱衆も同前二被罷上候、仙北、由利、庄内之一揆、端々雖発申候、不経時日被申付候、去月至加州帰陣被仕、即五日二上洛被申候」(上掲『新編弘前市史資料編2近世編1』18頁)なお、前号の注17)(紀要20頁)も参照。

<sup>10)</sup> 天正19(1591)年6月20日付で為信は、秀吉から九戸一揆への出陣を促す朱印状を受け取っている。「奥州奥郡為御仕置江戸大納言、尾張中納言、越後宰相、其外被遣御人数候、然は南部家中企逆意族可加成敗候旨被仰出候条、大谷刑部少輔申次第其方事可相動候也、六月廿日(朱印)津軽右京亮とのへ」(「国史津」上掲『新編弘前市史資料編2近世編1』20頁)なお同日付で秀吉は、伊達政宗にも朱印状を下し、九戸一揆を鎮圧するための便宜を命じている(同書21頁)。

<sup>6)</sup> 「伊達政宗は、天正十九年二月四日(洋三月二十八日)に入京した(小林清治著『伊達政宗』二二三ページ)から別人であろう。」(同上290頁)

<sup>7)</sup> 「こうして指示された日、すなわち四旬節の第一日曜日(三月三日)になると(巡察)師は登城するように召喚された。」(上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第1期第1巻』(222頁)なお一連の日付は、ルイス・フロイス著 松田毅一・川崎桃太郎訳『完訳フロイス日本史12キリシタン弾圧と信仰の決意 大村純忠・有馬晴信篇IV』中央公論社2010年の巻末「日本史」年表(260-261頁)に従った。大坂の日付は、上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』第二十五章(82-92頁)及び同章注(3)(92頁)を参照した。



このように、ヴァリニャーノが大坂、京都に滞在した天正19年閏1月1日から2月1日までの間に、為信らが上洛していたことはほぼ間違いなく、ヴァリニャーノを訪ねることは、時間的な側面から十分可能であったといえることができる。

しかし、むしろ次のように解した方が適切であろう。秀吉政権はすでに天正17年9月には大名や有力家臣の「女中衆」の上洛と在京を命じ、人質徴収を実行していた<sup>11)</sup>が、天正18年に奥州仕置を行って全国統一を果たした際には、奥羽地方の諸大名に対して参勤と人質徴収を命じ、同年末までに多くの大名が妻子と家臣を伴って上洛していた<sup>12)</sup>。

ヴァリニャーノが都に滞在していた時期は、諸大名が参勤のため、都に押し寄せていた時期と重なっていた。大名の参勤の慣習をヴァリニャーノも理解しており<sup>13)</sup>、この機会を利用

して諸大名と積極的に面会した。彼らはこの度、宣教師としてではなく、インド副王使節という公の立場にあり、大名たちにとっても訪問しやすい状況にあった。インド副王使節が秀吉に謁見する件は大いに話題になり、都に居る人々にとって稀に見る一大イベントとなった。ヴァリニャーノ一行が大坂から都入りする際の様子、次のように描かれている。

翌日になってポルトガル人たちは、盛装し行列を整えて都へ出発した。一行が都に到着すると、盛装した異国人を見ようとして四方から群衆が押し寄せた。そして驚嘆の目は高まるばかりであった。数か月前に〔我らが既述のように〕朝鮮国王の使節も都に赴いたが、朝鮮やシナの習慣に従ったもので、多数の随行者を伴ってはいたが（下品であり）重要な人々は誰もいなかった。そこでヨーロッパの儀仗とても彼らと同じであろうかと考えられていたのである。それが今回の、我ら使節（一行）の華麗さは驚嘆し、このような光景は都では初めてのことだ、と噂された。…中略…

<sup>11)</sup> 上掲 長谷川成一「天正十八年の奥羽仕置と北奥・蝦夷島」（15-16頁）

<sup>12)</sup> 同上論文によると、秀吉政権の人質徴収は、妻子の在京と大名自身の参勤が含まれており、その後の名護屋出陣や伏見城築城などの軍役を見越した政策であった。伊達政宗と最上義光は天正18年7月26日に、陸奥国の南部氏、出羽国の戸村氏は同年7月27日に「足弱衆の上洛」を命ぜられるなど、奥州仕置と並行して下命された。多くの大名は、その年の奥羽地方での諸一揆を鎮圧後、同年末までに妻子とともに上洛している。「奥羽地方の諸大名に足弱衆の上洛を命じた七月晦日の朱印状は、奥羽両国を手中にしたと考えた秀吉が、検地もさることながら両国大名衆の参勤と足弱衆の上洛をまず構想し、実行に踏み切ったといえよう。換言すれば、奥羽両国並びに「津輕・宇曾利・外浜」までの各大名達の参勤と足弱衆の上洛を命じることで、豊臣政権の軍事動員が全国に及ぶことが可能になり、ここにその軍役体系が完成し、全領主階級を指揮下においたといってもよからう。」（同上21頁）

<sup>13)</sup> 全国大名の参勤時期と重なっていたことについて、イエズス会側も理解していた。ヴァリニャーノ一行が都へ到着する前、二ヵ月程「室」に留め置かれ、そこで正月を迎えたが、参勤帰りの多数の大名がヴァリニャーノと遣欧使節らを訪問している。この時多くの大名が訪問した事情について、フロイスは『日本史』で次のように記している。「室で生じたことを理解するため

には、日本では、正月、つまり最初の月と称せられる（一）年の第一の月に、すべての家臣と従者は臣下として奉仕する身分を感謝するために主君の許に伺候することがあまねく習わしとなっていることを知っておかねばならない。日本では、こうした伺候と敬礼のことを、礼を為すと呼んでいるが、それは日本の一般的な習慣であり、今や日本全国の絶対君主となった関白は、（人々が）自分に対してこの慣習をかならず遵守するようにと強制した。それゆえこの正月の時節になると、日本中のすべての領主と武将たちが、親しく関白に礼を尽すために伺候するのであるが、それも日本で慣習となっているこの（正月の）時期においてのみならず、（関白）の身になんらかの慶事、もしくは悲しい事があったような別の機会にも特別に参上することになっている。これら（日本の）諸侯は誰も皆、彼を大いに恐れており、彼の意志に従って行動することを欲し、かつ彼に対して自らが抱いている並々なぬ愛情を示したいと切に望んでいるので、そのような際には、たとえ僻遠の地方からでもかならず伺候し、つねに立派で高価な贈物を携えねばならなかった。」（上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』65-66頁）

(関白殿は)かくて都の所司代と増田仁右衛門を呼び、(巡察)師とその一行にはすべて必要なものを贈与し、邸宅の武士たちには、騒ぎを防ぐため警備にあたり我らの仲間に非礼な振舞いが加えられぬよう、監視を命じた。<sup>14)</sup>

また二十六人をしたがえた使節一行が秀吉との謁見に向かって行列した際にも、インド副王からの豪華な贈物を運び、人々の注目を集めた。

(巡察)師が出発した邸宅から到着した(聚楽の)城に至るまでの間、すべての街道は、それを見ようとする見物人でいっぱいになり[人々が自ら語っていたように]、都が始まってこの方、このような光景は初めてのものであった。<sup>15)</sup>

ヴァリニャーノや天正遣欧少年使節らが大阪、京都に滞在中、毎日のように多くの大名の訪問が後を絶たなかったことは、この時期が奥羽地方の諸大名の参勤を含む「足弱衆の上洛」と重なったことと、華麗な出で立ちで現れたインド副王使節団の訪問が注目度の高いイベントであったことが要因であると考えることができる。このような状況において、他の大名らと同様に都を訪れていた為信が、時の人ヴァリニャーノを訪問したとて、何ら不自然なところはない。

フロイスによる問題の記述における「奥州の大名」が津軽為信であるという仮説の検証項目として、上記の① 為信がこの時期に巡察師ヴァリニャーノを都で訪問した可能性については、矛盾点は見出されない。

### (3) 高山右近との接触の可能性

フロイスの問題の記述では、「奥州の大名」

は「(高山)右近殿を通じて我らの説教を聞くことを望むようになった」としている。「奥州の大名」が為信のことであれば、為信がキリスト教に接近することになった「契機」に、キリシタン大名高山右近の存在が浮かび上がってくる。本節では、問題の記述に至る高山右近の経歴を概観し、為信との接触の可能性を検証する。

高山右近は、天文 11 (1552) 年に高山飛騨守の長男として生まれ、父がキリシタンとなったことから、永禄 7 (1564) 年に家族や家臣とともに受洗した<sup>16)</sup>。父子とも元亀元 (1570) 年に高槻に移って信長に仕え、天正元 (1573) 年に右近は高槻城主となった。高槻には聖堂が建てられ、天正 9 (1581) 年にヴァリニャーノは、巡察のために都を訪れた際、わざわざ高槻の教会で復活祭のミサを挙げている。本能寺の変の後、右近は秀吉を支えて明智光秀と戦った。その後もイエズス会宣教師の活動を積極的に支援し、安土にあったセミナリヨ(神学校)を高槻で再開し、大阪に聖堂を建立している。天正 13 (1585) 年、明石に移封され、六万石の城主となった。右近は茶人としても知られ、利休の弟子として彼と交流があった<sup>17)</sup>。

天正 15 (1587) 年、右近は九州征伐で活躍するが、この年「伴天連追放令」が発せられる<sup>18)</sup>。この時秀吉は、右近に棄教を迫るが、右

<sup>16)</sup> 高山右近の生涯については、主に上掲の海老沢有道『高山右近』及び H. チースリク『高山右近史話』聖母の騎士社 1995 年を参照した。

<sup>17)</sup> 茶人としての高山右近、キリシタンと茶道に関する文献に、西村貞『キリシタンと茶道』全国書房 1948 年、上掲『高山右近史話』における「十八 茶道とアガベ」(236-257 頁)、中山裕樹編『高山右近 キリシタン大名への新視点』宮帯出版社 2014 年の津津朝夫「第四章 文化から見た高山右近」(258-273 頁)などがある。

<sup>18)</sup> 「伴天連追放令」は、天正 14 (1586) 年にイエズス会準管区長コエリヨとフロイスが大坂城で秀吉と謁見した際、秀吉の前で政治問題に言及し、キリシタンの領主らが宣教師らの指示で動くことや、外国の軍事的援助を約束するなどの不用意な発言が主要因であるとされる。これについては、上掲 H. チースリク『キリシタン史考』の「準管区長コエリヨの軍事計画」(180-205 頁)に詳しい。

<sup>14)</sup> 上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第 I 期第 1 巻』(220-221 頁)

<sup>15)</sup> 同上 223 頁

近は拒否した。このことは当然、秀吉の怒りに触れ、右近は明石の知行地を取り上げられ、追放された<sup>19)</sup>。右近は小西行長を頼って、淡路島、小豆島、次いで肥後（熊本）に移り住むが、天正16(1588)年、前田利家の加賀藩預かりとなった<sup>20)</sup>。この地で、当初からではないようであるが、右近は二万石、父ダリオ（飛騨守）は三千石の知行を受けるようになる<sup>21)</sup>。フロイスは、右近が加賀で「何一つ責務を負っていない」と記している<sup>22)</sup>が、彼は前田家の武将（人持組頭）

として小田原や関ヶ原等の戦に参陣したし、平時には民政官（横目衆）の一人として前田家の政務に参与していた<sup>23)</sup>。

天正18(1590)年、秀吉の小田原攻めに際して、右近は秀吉側につく前田家の武将として参陣した。前田軍は、4月から6月にかけて関東周辺の諸城を攻略し、右近は手柄を立てたものの、秀吉との和解は為されなかった<sup>24)</sup>。

既述の通り、津軽為信は小田原の役に参陣し沼津で秀吉と謁見したという説があり、事実であれば、高山右近の人生のなかで為信との最初の接触の可能性が指摘できるが、実際には為信の小田原参陣はなかったと見られている<sup>25)</sup>。したがって、この年にフロイスの問題の記述における「(高山) 右近殿を通じて我らの説教を聞くことを望むようになった」を当てはめるのは不自然である。

すると、為信が右近と最初に接触した可能性は、天正19(1591)年における当のフロイスによる問題の記述の時期、すなわち前節で見た為信の「足弱衆の上洛」に際する京都滞在時ということになる。右近もこの時、ヴァリニャーノを訪ね大坂、京都に滞在していたからである。そこでこの文脈において、右近がどのような立

<sup>19)</sup> 天正15年6月19日に発せられた「伴天連追放令」の五カ条と、前日の18日に大名向けにキリシタン入信について公儀に従うよう促した十一カ条との関係には、議論がある（上掲H. チースリク『高山右近史話』218-219頁参照）。上掲『高山右近 キリシタン大名への新視点』所収の編者による論文「加賀前田家と高山右近」では、次のように解釈されている。すなわち、「右近の宗教的感化力に脅威を感じた」秀吉は、19日に右近に棄教を迫ったが、右近がこれを拒否したことから、「右近に対する怒りと弾劾の思い」から、五カ条の文面、特に「領主はその土地の当座の領主に過ぎない」ことを記した第二条の明記に繋がり、それが翌20日に、早速イエズス会準管区長コエリヨに渡された（同書63-68頁）。

<sup>20)</sup> 右近が加賀預かりになった事情について、上掲の中山裕樹「加賀前田家と高山右近」では、日本側とイエズス会側の先行研究を検証し、「秀吉の強い意向がまずあり、前田利家や大納言秀長らの取り成し・嘆願は二次的なものと理解できる。右近の加賀行きは秀吉の掌中でなされ、その監視を受けていたといえる。文禄四年に前田利家が得た越中新川郡（太閤蔵入地）は、右近のような客将を抱えていた前田家への代償と見ることでもある」とし、さらに「一向一揆の伝統を受け継ぐ加賀門徒の世界に送れば、右近の宗教的感化力は十分押さえられると見込んだから」と推測している（68-73頁）。

<sup>21)</sup> 石高について上掲『高山右近史話』264頁、および上掲の海老沢有道『高山右近』（154頁本書では二万七千石）を参照。利家が家中の不満に配慮して、右近に当初から高額の知行を与えなかったことについて、上掲の中山裕樹「加賀前田家と高山右近」では「利家家臣として二万石を超える知行を得たのは、おそらく文禄年間のこととみられる。右近は前田家客将として、天正十八年（一五九〇）の関東の役（小田原の北条攻め）に出陣し手柄をたて、秀吉からも忠誠を尽くしたと認知されたあと、一定の知行が下されたのであろう」（73頁）と推察している。

<sup>22)</sup> 「この人に対して我らの主は、多くの辛苦によっ

て彼の信仰を試練にかけた後で、加賀の国王のもとで恩恵を受けるように取り計らわれた。関白殿の〔と人々が信じているように〕命令で、年四万俵の俸禄が彼に与えられ、しかも何一つ責務を負っていないのである。」「一五九〇年十月十二日付、長崎発信、ルイス・フロイス師のイエズス会総長宛て、一五九〇年度・日本年報」上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第1期第1巻』（181-182頁）

<sup>23)</sup> 上掲の中山裕樹「加賀前田家と高山右近」（78-80頁）では、「越中古文書二」「国事雑抄」「万治已前御定書」等の『加賀藩史料』の記録をもとに右近が横目衆の一人として活躍していることを確認している。

<sup>24)</sup> 「前田利家の軍は四月に上野松井田城（群馬県磯氷郡）を、六月には武蔵鉢形城（埼玉県大黒郡）、ついで八王子城（東京都八王子市）を攻略、そして小田原を囲んだが、右近もその下にあって、クルスの旗をかざして華々しい軍功をたてた」（上掲の海老沢有道『高山右近』155-156頁）

<sup>25)</sup> 前号の注15）（紀要20頁）を参照。

場で行動していたかを、節を改めて丁寧に分析してみよう。

#### (4) 取り持ち役としての右近

件のインド副王の秀吉謁見にあたり、高山右近はヴァリニャーノを訪ねるため、加賀から大坂に出て来たことを、フロイスは次のように伝えている。

ところで（高山）ジュスト右近殿は、（大坂の）巡察師を来訪する儀礼で、他の人々に劣りをとることはなかった。右近殿は（巡察）師がやがて入洛されると聞くと、都から五十里隔たった加賀の国（金沢）から都に急行した。右近殿は諸領主、とりわけ関白殿と友誼が厚かったため、オルガンティーノ師は我らの便宜を取り計らってもらおうと右近殿をしばらく（都）に引き留めた。右近殿は用件を処理してから大坂に来たが、その到着は我らにとって大きな喜びであった。巡察師が間もなく〔すなわち一時間ほどたって〕到着した。<sup>26)</sup>

右近が大坂に来たのは、ヴァリニャーノが大

坂に到着した同日のこととされるので、1591年2月19日（和暦天正19年1月26日）である。右近の父ダリオも同様に都にやってきたとされ、父子はヴァリニャーノと行動をとともにしていたとされる<sup>27)</sup>。上記引用に「右近殿は諸領主」と通じていることからオルガンティーノに引き留められていたとあるように、多くの大名に名を知られ交流のあった右近が、ヴァリニャーノが大坂、京都に滞在中に宣教師から期待された役割は、大名級の人々とヴァリニャーノとの「取り持ち役」ということができよう。

そもそもヴァリニャーノのこの度の秀吉訪問は、伴天連追放令によって危うい立場に置かれていたイエズス会宣教師として行ったものではなく、インド副王使節という「外交官」としての地位を活用していた。そのため、ヴァリニャーノ一行には警備が付けられ、滞在中の安全は保証されていた。ヴァリニャーノは、この公的な立場を利用して、都で要人との面会を行ったわけである。限られた期間ではあるが、時に都には「足弱衆の上洛」とともに、全国から多くの大名が押し寄せていた。この機会に、どのような要人と会うべきかについて宣教師たちだけで判断できたはずもなく、日本の政情や政権に関わる重要な大名級の人物や彼らのキリシタンに対する姿勢等を熟知した指南役、信頼のおける取り持ち役が当然求められたはずである。右近は、その適役であった。

<sup>26)</sup> 上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第I期第1巻』（219-220頁）この時のことは『日本史』ではより詳しく次のように記されている。「巡察師が大坂に着くと、すぐにそこに来た人たちのうちには（高山）ジュスト右近殿がいた。彼は都から五十里近く隔たった加賀の国にいたが、（巡察）師からの書状によって、彼の到来を知り、さっそくオルガンティーノ師に逢おうとして都に赴いた。また（巡察）師がまだ室に滞在していると思い、是非そこに行こうとしたが、オルガンティーノ師はこれを引き留めた。（ジュスト右近殿は）（オルガンティーノ師）の助力を得て、諸領主、ことにジュストの人の友人である（黒田）官兵衛殿と交渉したが、（ジュスト右近殿）はあたかも家の（使い走りをする）若者のように、司祭から種々の伝言を帯びて行った。彼は、巡察師が大坂に着くわずか一時間前に、そこに到着した。（巡察）師も他の一同も、いずれも（ジュスト右近殿）と逢って一方ならず喜んだ。」（上掲『日本史2 豊臣秀吉篇III』86頁）

<sup>27)</sup> キリシタンたちが「一種の組を組織」し、信仰共同体を保っていたことを記す文脈で、「これらの頭目の第一人者と見なされるのは、加賀国にいる（高山）ジュスト右近殿である。殿は危険や損得を無視して、精神的にだけでなく物質的な援助によって、貧しい人々を助けた。そして（巡察）師が都に滞在している間は、殿は決してその側を離れようとはしなかった。（高山）ジュスト（右近）の父なる、越中国のダリオも同様に振舞った。彼は（巡察）師が都に到着したことを知ると、六十歳を越える身で真冬の大雪の降りしきる中を、五十里以上もの遠方からはるばる都にやって来て（巡察）師が出発するまで都に留まった」と記されている（同上 236頁）



この時の右近自身の心境について、フロイスは「(自分は) この迫害と追放を通じてデウス様を大いに認識するに至った、と述べ、また(自分が) デウス様から受けることができた最大の恩恵の一つは、(領主や重臣たちとの) 危険の多い用務や交際のある関白殿の政庁の繋がりや交渉から解放されたことである」<sup>28)</sup>と記している。そして右近自身がヴァリニャーノに会った際に「この俗世を去り、さらに息子に家督すべてを譲って、我らの(司祭)仲間もごくわずかしかない、日本国の何処かに隠居したい」<sup>29)</sup>という望みを打ち明けたとされる。しかし、右近の意向に対してヴァリニャーノは反対し、次のように述べている。

もし万一、関白殿が薨去されたら、誰が後継者になろうと、その後継者は、貴殿を(従前)より優れた地位に就かせるに違いない[なぜなら右近殿は、日本国の有力な領主たちの中で最上の地位にあり、また尊敬されていたからである]。かくて(貴殿は)数他の靈魂の最上の回心のために、デウスのために大いなる光栄の道を開くことができよう。<sup>30)</sup>

つまりヴァリニャーノは、今後の政界の変化の中でキリスト教の布教に寄与する役割があることを理由に、多くの有力者から一目置かれている右近の引退の意向に反対した。宣教師たちにとって右近の存在は得難く、引退は望ましくなかった。この度の訪問においても、諸大名との「取り持ち役」という重要な役割が期待されていた。こうして、「これらの理由を聞いて右近殿は思い留まった」<sup>31)</sup>とされる。

3月3日に秀吉との謁見を済ませたヴァリニャーノは、3月5日に秀吉が尾張に出向いてから二十二日間都に滞在した。フロイスはその間に「巡察師は関白殿以外には、個人的には誰も訪ねはしなかったが、人を遣わして他の諸侯を訪問させた。ところが反対に、いろいろの異教徒の諸侯は自ら来訪した」と記している。つまり、この期間にヴァリニャーノを訪問した諸侯には、ヴァリニャーノ側から人物を特定して訪問を促した者と、自らの意志で訪問してきた者の二種があった。

前者の例として、「豊臣秀次」「毛利輝元」「宇喜多秀家」が挙げられている<sup>32)</sup>。これらの人物は、明らかに秀吉とつながりの深い重要人物であり、その人選に「取り持ち役」としての高山右近が、関与したのは間違いないであろう。

続いて、後者の人物、すなわちヴァリニャーノがこの機会に訪問させた秀吉政権の重要人物のリストになかったが、「自ら巡察師を訪ねて来た」諸侯の例が挙げられる。この例示こそが、フロイスの問題の記述、すなわち「前田利長」

---

あったけれども、この問題については(最終的には、巡察)師の決定と意見に従う決意でいたことだし、(巡察師の談話における)多くの道理に促されて、(その決意どおりにすることにした。)それというのも、彼はそのためにこそ、久しい間、(巡察)師に逢うことを渴望していたと述べていたのであった。(かくて)彼は、ついに(巡察)師から忠告されたようにすることに同意し、諒承した」とされる。(上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』88頁)

<sup>32)</sup>「すなわち、(巡察)師は、人を遣わして、関白殿の甥で後嗣でもある大納言(秀次)を訪問させたところ、殿はこの儀礼を非常に心から歓迎し、日本の贈物さえ届けた。(巡察)師はまた、関白殿に次ぐ九カ国の領主である毛利(輝元)殿と、十三カ国の領主である(宇喜多)八郎(秀家)殿〔彼は関白殿の一養女を夫人にしている〕をも訪問するよう人を遣わした。」(上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第I期第1巻』(233-234頁)なお、ほぼ同じ記述がある『日本史』では、秀次への贈物について「百グルザード以上の価値がある日本の反物」とし、毛利輝元については「領地と財産において今までのところ関白に次ぐ…」と補っている(上掲『日本史5 五畿内篇III』283頁)。

<sup>28)</sup> 上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第I期第1巻』(220頁)

<sup>29)</sup> 同上

<sup>30)</sup> 同上

<sup>31)</sup> 同上 なお右近の引退の意向にヴァリニャーノが反対した次第について、『日本史』にはより詳しい記述が見られる。それによるとヴァリニャーノの反対意見に対して右近は「このことについて(巡察)師に大いに抗弁するところが

と「奥州の国の大名」の訪問を伝えた文章であり、加えて「蒲生氏郷」の名が挙げられている。

前田利長にとって右近は父の客将として知己の間柄であろうから、利長が自らヴァリニャーノを訪ねた際、右近が「取り持ち役」として彼を紹介したということであろう<sup>33)</sup>。三番目の蒲生氏郷は、この時すでにキリシタンであったので、自らヴァリニャーノを訪問したことは自然なことであった<sup>34)</sup>。

さて、問題の「奥州の大名」であるが、彼が、「(高山) 右近殿を通じて我らの説教を聞くことを望むようになった」というフロイスの記述をどのように解すればよいだろうか。

前述のとおり、高山右近が宣教師らから期待された役割は、大名級の人々とヴァリニャーノ

との「取り持ち役」を務めることであった。政界に通じていた右近は、この機会にヴァリニャーノを訪問させるにふさわしい重要な大名の人選を指南するとともに、「自ら巡察師を訪問」してきた大名級の人物との取り持ちを行った。「奥州の大名」は右近の人選リストにはなかったが、「自ら」訪れてきた。大名級の人物に対しては、まず右近が窓口となって名前や出身等の情報を得たのち、ヴァリニャーノに取り次いだはずである。

この際、布教に熱心であった右近は、訪問者がキリスト教に関心があると見た場合には、説教を聞かせる準備をしていたことは想像に難くない。他方でこの頃、伴天連追放令により表立った布教は避けられ、秀吉の姿勢に対するイエズス会士の警戒心が強い時期であった。右近はこの時、前年の小田原での軍功にもかかわらず、秀吉との目通りはなく、和解は成立していなかった。ヴァリニャーノは右近が政界に返り咲くことを願っており、目立った布教により秀吉の怒りが再燃し、右近が危うい立場になることは避けたかった。このようなジレンマが、問題の記述において、前田利長と「奥州の大名」が、「密かに教理の講義を聞いた」が、「このことが公になったら、そのことで(ダリオとジュスト 右近殿の身の上に) 大きな変動をもたらす危険も恐れられたので、洗礼を受けることはより適した時期まで延ばすことにした」<sup>35)</sup>と表現されているのである<sup>36)</sup>。

これらのことから、「奥州の大名」が「(高山)

<sup>33)</sup> 前田利長は、右近を召し抱えていた前田利家の長男で、越中守山城主であった。利長は、右近の父ダリオを預かっていた。慶長 4 (1599) 年に利家が病死した後、利長が家督を継ぐが、高山右近は禁教令にマニラ追放に至るまで、利長の重臣として仕えている。イエズス会報告には、利長がキリシタンに理解があったが最後まで受洗には至らなかったことについてたびたび言及されている。例えば、フェルナン・ゲレイロ編「一六〇五年の日本の諸事」(上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第 I 期第 5 巻』所収) には、利長が司祭を礼節をもってもてなしたことが語られた後、「この殿はデウスの教えのことに抱く親愛の情と、それらを聞きたいとの強い望みをますます示している。しかし、これを実行に移しきことは決してない」(同書 116 頁) とある。

<sup>34)</sup> 蒲生氏郷は、もともと近江の領主であったが、天正 12 年に伊勢に転封された大名で、右近の手ほどきで天正 13 (1585) 年に受洗した。受洗に至った経緯については、上掲『日本史 1 豊臣秀吉篇 I』(183-187 頁) に詳しい。氏郷は、この度のヴァリニャーノとの謁見の前年 8 月に、秀吉のもとで小田原征伐と奥羽仕置に加わり、奥州会津に転封されたばかりであった。右近や前田利家とも親しく、右近とともに黒田孝高を回心させたことも知られている。後に名護屋在陣中に長崎に赴き、ヴァリニャーノを二度訪問している。「…二度も巡察師および他の司祭たちに会いに来た。(そして) 種々多くの贈物を携え、その都度二時間以上も和やかに談話した。」(上掲『日本史 12 西九州篇 IV』159 頁) 氏郷の死の間際に、右近が献身的に付添ったことも伝えられている。

<sup>35)</sup> 上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第 I 期第 1 巻』(224 頁)

<sup>36)</sup> これに続く記述、すなわち「より身分の低い貴人たちが聴聞し、(彼らは) 受洗した。このようにもし自由に説教を聞くことができるならば、大勢のキリシタンが生まれたことであろう。だがそれは非常な危険をもたらす得ることで、きわめて慎重に振舞う必要があった」(同上) も、同様の趣旨から理解することが出来る。身分の低い者の受洗は大勢に影響しないために歓迎されたが、大名級の人物の受洗は秀吉の対キリシタン政策に悪影響を及ぼすと推察され、「きわめて慎重」な対応が求められた。

右近殿を通じて我らの説教を聞くことを望むようになった」というフロイスの記述は、次のように解することができる。前年の奥羽仕置により、「足弱衆の上洛」とともに上洛していた「奥州の大名」は、インド副王使節団が秀吉に謁見するために大坂、京都に滞在していた折に、使節ヴァリニャーノを訪ねた。訪問時に「取り持ち役」を務めていた高山右近の勧めでキリスト教の説教を聞くことを望むようになったが、伴天連追放令の敷かれた状況下で、受洗については先延ばしとなった。

ここまでの検証により、先の検証項目の②この時期までの為信と高山右近の接触の可能性について、初見の可能性が1591年初頭における問題の記述の時期であることが明らかになった。もとより、件の「奥州の大名」が為信であることの論拠は見出されていないが、この大名が右近を通じてキリスト教に接し、ヴァリニャーノを訪問した次第がより明瞭に浮かび上がった。

##### （5）ヴィセンテ修道士との接点

イエズス会年報におけるフロイスの問題の記述では、「奥州の大名」が「説教を聞くことを望むようになった」と記されているが、ほぼ同じ内容を伝える『日本史』の記述には、前述のように、「ヴィセンテ修道士が彼らに説教し、彼はよく理解し、（巡察）師を訪問した」という補足情報があつた。

既述のように、為信がキリスト教に接近し信教が受洗した次第が記された1596年のイエズス会年報には、「彼は異教徒である父親の願いで受洗したが、（父親は）以前大坂でヴィセンテ修道士から我らの信仰について多くのことを聞いたことがあり、本年には説教を聞き終えてキリシタンになる決心をしていた」<sup>37)</sup>との記述が見られた。為信とヴィセンテ修道士との接点は、「奥州の大名」が為信である可能性を示唆

しており、検証を要すると思われる。

ヴィセンテ修道士は、養方パウロ<sup>38)</sup>の息子で、1580年にイエズス会士となり、ルイス・デ・アルメイダから医術を学んだ医師でもあった。彼の名は、イエズス会日本年報やフロイス『日本史』に頻繁に登場し、優れた説教師として主に身分の高い人物を多く改宗に導いたことが知られている<sup>39)</sup>。高山右近との交わりもあった<sup>40)</sup>。

『日本史』には、ヴァリニャーノ一行が長崎から都に向かう道中に、ヴィセンテ修道士の活躍が複数回伝えられており<sup>41)</sup>、彼がヴァリニャーノと同道していたことが知られている。

<sup>38)</sup> 養方パウロは医師で日本語力に優れ、イエズス会に仕えたキリシタンである。養方パウロについては上掲『吉利支丹文獻考』の「五 養方パウロの著作」（123-157頁）に詳し。

<sup>39)</sup> フロイスは彼を、イエズス会士に信頼された有能な修道士としてたびたび紹介している。たとえば「彼は巡察使（ヴァリニャーノ）によって、（巡察師がインドへの）出発に先立ちわざわざ豊後から呼び寄せられた人で、優れた説教師であり、言葉は格調高く、弁舌はさわやかで、（その上）教えを説く際に、日本の（仏教の）諸宗派のことに精通していたので（異教徒と）良く対決するを得た。（日本の諸宗に通じていることは、）仏僧その他異教徒の誤謬や偏見を論拠をもって打破するためには説教師として何よりも必要な条件だった。」（松田毅一・川崎桃太訳フロイス『日本史1 豊臣秀吉篇Ⅰ』中央公論社昭和五二年98-99頁）なお、ヴィセンテ修道士の経歴について、同書第一章の注（16）（113頁）を参照。

<sup>40)</sup> 例として、高山右近がフランシスコ・ペレス司祭とヴィセンテ修道士を越中の国に迎え、布教に当たったことが記されている（上掲『日本史12 西九州篇Ⅳ』253-254頁）。

<sup>41)</sup> ヴァリニャーノ一行の旅路の記録で、ヴィセンテ修道士の名が出てくるのは、次の場面である。まず肥前国の佐賀を通ったとき、鍋島直茂の息子に迎えられ、この息子と代官と重臣たちに説教を乞われ、ヴィセンテ修道士が二度説教した（上掲『日本史2 豊臣秀吉篇Ⅱ』55頁）。その後、毛利壱岐守の小倉城で重臣たちに説教をした（同上59-60頁）。さらに、ヴァリニャーノ一行が室で二ヵ月滞在中、黒田官兵衛の息子である黒田甲斐守長政が、かねてからの疑問をヴィセンテ修道士に語り、解決している（同上71-73頁）。そして一行が室に滞在中、使節団の上洛手続きのためオルガンティーノが、ヴィセンテ修道士を伴い都入りしている（同上76-77頁）。

<sup>37)</sup> 上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第Ⅰ期第2巻』（241頁）

ところが、ヴィセンテ修道士は、秀吉に謁見するインド副王使節団の一員ではなかった。フロイスが示す使節団のメンバー、すなわち司祭を除く二十六名の中にヴィセンテ修道士の名はない<sup>42)</sup>。ヴァリニャーノ一行が室に滞在中、使節団の入洛に伴う諸手続きのためオルガンティーノ神父とヴィセンテ修道士が都に先に行き、様々な連絡を室に送っていることからすると<sup>43)</sup>、ヴィセンテ修道士はオルガンティーノ神父とともに一行を案内しつつ、秀吉との謁見のために様々な工作を行う役割を担っていたものと思われる。また公的にはインド副王使節の上京とはいえ、道中多くの領主らに会うことが想定されており、実際にヴィセンテ修道士が諸所で説教を行ったことから知られるように、布教に備えた同道であったことは想像に難くない。

この時のヴィセンテ修道士の役割から、「奥州の大名」が「ヴィセンテ修道士が彼らに説教し、彼はよく理解し、(巡察)師を訪問した」という記述は、よりよく理解することができる。この「奥州の大名」は、自らヴァリニャーノを訪問した際、「取り持ち役」の高山右近を介して説教を聞くことを望んだ。右近は、ヴァリニャーノ一行に同道し大名級の人物に説教することに長けていたヴィセンテ修道士を紹介した。こうして「奥州の大名」に対してヴィセンテ修道士が「説教をし、彼はよく理解し」、ヴァリニャーノを訪問するに至った。

さて、先の検証項目の③ 為信が大坂で説教

を受けたヴィセンテ修道士との接触の可能性については、この時期確かにヴィセンテ修道士は使節団とともに同道していたことから、為信とこの修道士の接点に時間的な矛盾がないことが確認された。とはいえ、1596年のイエズス会年報に、為信が「以前大坂でヴィセンテ修道士から我らの信仰について多くのことを聞いたことがあり、本年には説教を聞き終えてキリシタンになる決心をしていた」という記述を、上記の「奥州の大名」がヴィセンテ修道士から説教を受けた件と同一視することができる論拠は見出されない。以下では、その後1596年に至るまでのヴィセンテ修道士の動向を確認し、為信との時間的な接点を確認するととどめたい。

その後のヴィセンテ修道士が、1592年に都で活動していたことはイエズス会の目録(日本耶蘇會目録)でわかっている<sup>44)</sup>。1594年のイエズス会日本年報にも、オルガンティーノ神父とヴィセンテ修道士について「我らは都にすでに二年居住している」<sup>45)</sup>と記されており、1592年から1594年にかけて、都方面で活動していたことが窺われる。

1595年のイエズス会年報には、都にいるイエズス会士「の中の二名は日本国の諸宗派についての知識が非常に深く、また説教者たち一同の中でももっとも優れている」<sup>46)</sup>とあるが、この説教者はヴィセンテ修道士に間違いない。

1596年のイエズス会年報には、ヴィセンテの名前が頻出する。「都には我らの同僚の二名の司祭と、すべてが説教者である六名の修道士が住んでいて、彼らは絶えずその職務に専念している。大坂には一名の司祭と一名の修道士がいる。都や堺から、毎年何回か近隣の各地への非常に有益な布教が行われている」<sup>47)</sup>とあり、また同年の報告に「都の修道院長師は彼ら(使

<sup>42)</sup> 使節団のメンバーが書かれたフロイスの『日本史』の記述によると、「司祭たちを除いて総勢二十六名、すなわち四名の(遣欧使節の)公子、十三名のポルトガル人、公子に従う小姓の衣服をつけた七名の若者、これらの人々の通訳を務める一修道士と巡察師の通訳に当る他の修道士たちであった。」(上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』55頁)とされる。なお、同書の注(3)(4)(5)(109-110頁)によると、司祭はヴァリニャーノ、メスキータ、アントニオ・ローベスで、修道士はアンブロジオ・フェルナンデスとジョアン・ロドリゲスである。

<sup>43)</sup> 同上

<sup>44)</sup> 上掲『切支丹文獻考』(334頁)

<sup>45)</sup> 上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第I期第2巻』(4頁)

<sup>46)</sup> 同上 76頁

<sup>47)</sup> 同上 210頁



者）の後を追って、五十歳になっていて雄弁のゆえにすべての殿たちのもとで名声を博しているヴィセンテ（・トウイン）修道士をさっそく大坂に派遣した」<sup>48)</sup>とある。

このように、ヴィセンテ修道士は1592年から1596年まで、主に都を拠点に関西地区で活動していることが知られる。他方、既述のように、為信は文禄元年3月から4月頃（1592年5月頃）から文禄2年8月頃（1593年9月頃）まで名護屋に滞在していた。すると、為信がヴィセンテ修道士から説教を受けた「以前」とは、「奥州の大名」の一件があった1591年初旬の他は、1593年9月以降から1596年までのどこかということになろう。以上が、為信とヴィセンテ修道士との接触の可能性である。

#### （6）名護屋における為信と右近の接点

1591年初頭を描いたフロイスの問題の記述から、その後には為信のキリスト教への接近と信牧の受洗が描かれた1596年の年報の記述までには、約五年の期間がある。問題の記述に示された「奥州の大名」が、仮に為信でなかったとしても、その間にやはり、為信の身にキリスト教との何らかの接点があった可能性は否定できない。この間に為信がキリスト教に触れた明確な記録は皆無であるが、先に見たように、大名級の人物がキリスト教に接近する際、高山右近が宣教師との「取り持ち役」を担っていたことから、この約五年間における為信と右近との接点をもとに、その可能性を検証することができよう。

為信は、前述のように、天正18（1590）年末に、津輕仕置の終了を経て、大名の参勤を含む「足弱衆の上洛」とともに都入りし、翌年明けに、インド副王使節団の秀吉謁見のイベントに遭遇したと考えられる。その頃、秀吉政権は奥羽支配を確実なものとするため、政権に抗する勢力を鎮圧していたが、その一つに九戸一揆

があった。天正19（1591）年6月20日、秀吉は為信に対して九戸鎮圧に向けた出陣を命じる朱印状を下しているのが、為信は6月頃には津輕に帰国していたと考えられる。そして同年9月、為信は九戸氏鎮圧に加わった。

「足弱衆の上洛」や九戸一揆の鎮圧など、為信は秀吉政権の軍務を担う一大名となっていた。そして次の大規模な軍務は、朝鮮出兵の大本営である肥前名護屋への出陣であった。天正20（1592）年（すなわち文禄元年）正月付で、新しく関白となった秀次から全国の大名に朱印状が下され、同年3月から4月にかけて、名護屋には全国の大名が集結し、為信も参陣した。秀吉自身も4月に名護屋入りしている。名護屋での滞在は、年を越え翌文禄2（1593）年まで続いている。同年8月15日に秀吉が名護屋を立ち大坂に向かった後、大名たちは名護屋を離れていくので、為信もその頃には名護屋を離れたと考えられる。

名護屋には、前田家預かりとなっていた高山右近も参陣している。右近は伴天連追放令が下された際に棄教を拒否し、秀吉から知行を取り上げられ追放の身となっていた。前田家の武将として小田原征伐に加わり軍功を上げたにもかかわらず、秀吉との目通りは叶わなかった。しかし前田家の客将として名護屋在陣中、右近は秀吉との謁見が許され和睦したとされる。この件について、フロイスは次のように記している。

しかるに当（一五九二）年、（老関白は）急遽名護屋に出かけることとなり、彼の許である日話題が（高山）ジュスト右近殿のことに及ぶと、右近に逢い快く彼を迎えたいから（と言って）彼を召喚するよう命じた。かくて（右近が）（老関白）の命令で都に赴くと、（老関白）は下に行くように、そこで引見するだろうと期待させた。そして（老関白は）名護屋に二ヵ月近く滞在した後、彼を引見し、面前に出頭することを許したが、それは日本では和解の印しであり慣習に基づくやり方で

<sup>48)</sup> 同上 215 頁

あった。(老) 関白は彼を見ると優しく声をかけ、久しく汝に逢わなかったが、定めて窮乏の生活を余儀なくさせられたことであろうと言った。そしてその二日後には、特に位が高かつ親しい貴人以外には迎え入れることのない茶の湯(茶室)に彼を招いた。(その際) 彼は(右近と)ともに羽柴筑前殿(前田利家)、ならびに諸人からきわめて尊敬されている重立った一武将をも招待した。<sup>49)</sup>

秀吉との和睦が叶った後、右近は以前のように諸大名と交流したとされる<sup>50)</sup>。名護屋には先陣として朝鮮に出兵していない全国の大名が陣屋を設けて滞在していた。彼らはそこで、豊臣政権のもとで上手に立ち回り、滞りなく任務を遂行するために、有力大名に取次を求めるためのつきあいや情報交換を行っていた。上記の引用に、高山右近が前田利家らとともに秀吉から茶会に招かれたとされるが、茶の湯は大名同士の交流の場であり、政治的な意味合いもあった<sup>51)</sup>。他方、名護屋では城を中心に半径三キロ

メートルの範囲内に全国の大名とその家臣の陣屋がひしめき合っており、その不自由な生活の憂さをはらすため茶の湯の他、たびたび酒席が設けられ、蹴鞠、鼓や太鼓、能などが盛んに行われたとされる<sup>52)</sup>。右近も名護屋の陣屋に「二畳床無し」という小さな茶室を設けており、博多の豪商「神屋宗湛」一人を客にした茶会の記録が残っている<sup>53)</sup>。

為信もまた諸大名とのつきあいに奔走していた様子が、既述の南部信直の書状で描かれている。そこには、為信が徳川家康を通して南部信直との和睦を画策したが、家康は前田利家から為信が「表裏仁」、すなわち信頼のできない人物と指南されたことが伝えられている<sup>54)</sup>。また、信直の別の書状では、名護屋において「日本之つき合」に朝夕気遣う生活が記され、「為信は前田利家のところへ行ったが、しつこくものをいったので、利家の重臣奥村主計によってやり込められ恥をかいた」とされ、それ以来為信は

ると、秀吉は大坂城で組み立て式の黄金の茶室を所有しており、天正20(1592)年の名護屋入りの際にこれを運ばせており、5月28日に早速茶会を開いている。また、本拠地である名護屋城とは別に、静寂な屋敷「山里丸」を整備し、そこに茶室を設け、同年11月17日に茶会を催している。なお、秀吉は名護屋に能役者らを召し、山里丸で秀吉自身も能を練習したとされる。フロイスも、秀吉が能を演じたことを伝えている。「ある時、(老) 関白は寺沢(志摩守)の屋敷で劇(能楽)を催し、彼自身それに出演したが、その催しに参列するように招かれた幾人かの中にジェスト(右近)も加わっていた。」上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』(317頁)

<sup>49)</sup> 上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』(167頁)なお、続く記述で右近は、政界引退の望みをもっていることを、巡察師へ手紙で再度もらしている。「彼は名護屋から巡察師に宛てた書状の中で次のように伝えて来た。自分としては政庁の煩わしさの中で生きるよりは静かに隠退し、ひとり安らかに(余)生を過ごしたいけれども、妻子ならびに両親のことを思えば自分の考えを貫くわけにはいかない。今は過ぎ去った苦悩と危険から解放されたことを非常に喜び、かく計らい給うた我らの主の御憐れみに対してかぎりなく感謝している、と。」(同書168頁)なお、秀吉との和解に関する同様の記述は、1592年の年報(上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第I期第1巻』287-288頁)にも見られる。

<sup>50)</sup> 「この頃、(高山)ジェスト右近殿は名護屋にいた間、(日本人)が湯に入れて飲む草の粉末である茶の湯に専念していた。彼は名護屋の重立った武將たちを(茶席に)招待したが、八ヶ国の領主である(徳川)家康もその中にいた。政庁にいるこれらの武將たちは、彼から招かれることを大いなる好意と受け取っていた。彼は時には(老)関白の許へ伺候することがあったが、(老関白は)つねに上機嫌で(彼に接した)。」上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』(317頁)

<sup>51)</sup> 上掲『太閤秀吉と名護屋城』(229-237頁)によ

<sup>52)</sup> 上掲『太閤秀吉と名護屋城』(88-92頁)を参照。同書によると「名護屋城を中心として半径三キロメートルの範囲内に、百二十か所をこえる陣跡が確認されて」おり、その陣屋の配置は秀吉の奉行によって指定されていた。狭い陣屋には家臣らが国許ではめったに対面できない大名とともに生活していたという。

<sup>53)</sup> 上掲『高山右近 キリシタン大名への新視点』所収の神津朝夫「文化から見た高山右近」に、宗湛が「文禄元年十二月二十六日昼」と「文禄二年七月二日朝」に高山右近の茶会に招かれた次第を記録した『宗湛日記』『宗湛茶会日記』の内容が記されている(261-262頁)。

<sup>54)</sup> 文禄元(1592)年12月晦日の南部信直の書状(上掲『新編弘前市史 資料編2 近世編1』31頁)

利家への挨拶を避け、陣屋にこもったとされている<sup>55)</sup>。

ところで、為信の陣屋は秀吉が居住する名護屋城のすぐ隣に位置し、同じ丘陵地の「南東へ約八〇〇メートル下った所に前田利家、直線で北東へ約一キロメートルの所に徳川家康の陣屋がそれぞれ配置され」ていた<sup>56)</sup>。先の為信が恥をかいたことを伝える信直の書状の日付は文禄2年5月末であり、仮にそれ以降為信が前田利家への挨拶を止めたとしても、それまでの一年数ヶ月の間に狭い名護屋城下で、為信が徳川家や前田家の関係者と接触する機会は必然的に多かったといえよう。前田利家は、天正18(1590)年に津軽仕置のために直接津軽を訪れており、為信との面識があった。為信は前田利家から「表裏仁」と見られ、つきあいでもよく立ち回れなかったとされるが、利家との接触を示す信直の書状は、同時に、利家の家臣であり名護屋で諸大名との交流を再開した高山右近との接触の可能性を示唆するものである。

なお、フロイスの『日本史』によると、名護屋でもイエズス会士の布教が行われていた。文禄2(1593)年の四旬節には、右近ら名護屋に

居たキリシタンの願いで、司祭が一人派遣され十一日間滞在した<sup>57)</sup>。またジョアン・ロドゥリーゲス修道士と日本人のコスメ修道士が名護屋に数ヶ月滞在し、「きわめて重要人物である多くの異教徒の諸侯とも会談し、説教と談話によって我らの教えを彼らに知らしめ、それに親愛感を抱かせ、幾人かの異教徒の貴人には、キリシタンになりたい気持を起させた」<sup>58)</sup>とされ、実際にロドゥリーゲスは、秀吉や徳川家康に引見されたという<sup>59)</sup>。高山右近が、天体現象に関心の深い前田家に仕える「きわめて位の高い貴人」をロドゥリーゲスに引き合わせてもいる<sup>60)</sup>。また、名護屋ではポルトガルの衣装や小物が流行し、秀吉が名護屋から都に帰る際には、随行者たちがポルトガル風の衣装をまとっていたという<sup>61)</sup>。このようなことから、為信が名護屋でキリスト教や南蛮文化にまったく触れることがなかったとは言い難く、そこに高山右近の介在があった可能性も十分に考えられる。

#### (7) 伏見における為信と右近の接点

文禄2(1593)年8月15日に秀吉は名護屋を発ち大坂に向かい、引き続き大名勢も帰国している。ところで秀吉は、前年8月から伏見城

<sup>55)</sup> 文禄2(1593)年5月27日の南部信直の書状に「津かる右京、筑前殿へ参候て、はしめぬいつこく二物を申候て、奥村主計殿にこめられ、はちを取候、其後ハ弾正殿・筑前殿へも不参候、大事之つきあい二候間、きつかい計二候」と記されている(上掲『新編弘前市史 資料編2 近世編1』34頁)。なお、上掲『新編弘前市史 通史編2(近世1)』(61-64頁)の解説も参照。

<sup>56)</sup> 上掲『新編弘前市史 通史編2(近世1)』(65頁)を参照。同書では、「名護屋の大名陣屋配置図」を解説し、為信の陣屋が名護屋城のすぐ隣に位置していることについて「秀吉は、日本の支配を完了し、すべての大名を動員させることができる公儀としての力を誇示し、天正十三年九月の「唐国まで」の構想をいよいよ具体化するという意志を表明しようとするために、名護屋に参陣した奥羽大名勢の中でも、最果ての大名である為信を、統一政権のシンボリックに自らの近くに置いたのではないだろうか。さらに、一方では、不安定で内部崩壊しかねない軍勢を、天下人の軍勢として結束させる視覚的な役割も期待されたのかもしれない」(67頁)と推測している。

<sup>57)</sup> 上掲『日本史5 五畿内篇 III』(314-315頁)

<sup>58)</sup> 同上 315頁

<sup>59)</sup> 同上 315-317頁

<sup>60)</sup> 同上 317-318頁

<sup>61)</sup> 同上 324-325頁 このようなポルトガル衣装やキリスト教徒の持ち物の流行が都でも見られたことを、オルガンティーノ神父の書簡は、次のように伝えている。「このようにして名護屋においてと同じくこの都においても、彼らは十字架や聖遺物を首に吊して往来している。貴人たちのみならず、重立った人々までが(日本)国王(関白殿)自身のもとや、甥の新関白(秀次)のもとへ、このような姿をして行く。また彼らの多くが、ポルトガル人の服装を(真似)している。そのため彼らが幾人か連れ立って政庁に姿を現すと、日本人なのかポルトガル人なのか容易に区別がつかぬほどである。」上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第I期第2巻』所収の「一九九四年九月二十九日付、都発信、ニエッキ・ソルド・オルガンティーノ師のイエズス会総長宛書簡」(6頁)

の築城を開始していた。文禄の役の後、政権の機能は伏見に移転することになった。全国の大名家たちは伏見城下の屋敷に移転し、そこに妻子を住ませ、自らも参勤のために上洛した。本節では、伏見における為信と右近の接点を検証する。

伏見城は当初、秀吉の隠居城となる予定であったが、文禄2年8月に秀頼が誕生したことから跡継ぎとなる秀頼の権力拠点として本格的な城郭建築に変更され、文禄3年8月に指月伏見城が完成し、秀吉と秀頼は城入している<sup>62)</sup>。同年、城下町の整備が行われ<sup>63)</sup>、文禄4年に聚楽第が取り壊され、遺構が伏見城に運ばれる頃に、大名たちの伏見城下町への移転が本格化した<sup>64)</sup>。しかし文禄5(1596)年(すなわち慶長元年)閏7月に大地震(京畿大地震・慶長伏見地震)が起こり、指月伏見城が破壊されたため、秀吉は木幡山に新たに城を築くことを命じ、それは翌慶長2年に完成した。

長谷川成一「伏見桃山城下の津軽家屋敷」<sup>65)</sup>

は、津軽藩が伏見城下町の武家屋敷に、三つの屋敷を拝領していたことを、初めて確認している。同論文は、慶長元年の地震後の城下町における大名らの屋敷の絵図<sup>66)</sup>の中に、為信(「津軽右京亮」)の屋敷が二カ所(「伏見城の東側の端」と「南西の端」)、信牧(「津軽越中守」)の屋敷が一カ所あることを見出している<sup>67)</sup>。

この論文に掲載された絵図の拡大図から、意外なことが知られた。それは、城下町の「南西の端」にある為信の屋敷の西側に隣接する屋敷に、「高山右近長房」の名が見られることである。「長房」は右近の本名で、「右近」は通称であるから<sup>68)</sup>、この屋敷は間違いなく高山右近のものである。伏見城下町では政権の方向づけに基づいて大名屋敷が配置されていた。為信の領地高が三万石程度、右近も二万石程度あったとされるので、似たような領地高の大名らが隣り合わせとされたのか、配置の理由は知る由もない<sup>69)</sup>。ともあれ、伏見の城下町において為信と右近は、隣り合わせで屋敷を拝領されていたのである。

この頃に、右近が京都を訪ねていた記録がいくつか見られる。文禄3年2月7日、右近がキリスト教信仰に導いた蒲生氏郷が亡くなったが、高山右近は病床の氏郷を見舞い、最期まで看取ったとされる。都にいたオルガンティーノ

弘前市市長公室企画課(3-6頁)

<sup>66)</sup> 「伏見桃山御殿太閤撰政関白太政大臣一位豊臣朝臣秀吉公御城並大小名御屋舗之図」福岡市博物館蔵

<sup>67)</sup> 上掲「伏見桃山城下の津軽家屋敷」では、為信の二カ所の屋敷(「伏見城の東側の端」(A図)、「南西の端」(B図))の位置と絵図の拡大図が紹介されている。上掲『新編弘前市史 通史編2(近世1)』(109-112頁)では、この「津軽右京亮の屋敷」の他、「津軽越中守の屋敷」、つまり信牧の屋敷の位置と拡大図が掲載されている。

<sup>68)</sup> 「右近の幼名は彦五郎。長じて友祥、長房と称し、通称右近。また南坊、等伯と号した。」上掲 海老沢有道『高山右近』(3頁)

<sup>69)</sup> 上掲「伏見桃山城下の津軽家屋敷」(6頁)は、「伏見城の東側の端」の為信の屋敷近辺が「ほぼ同様の領地高の大名衆」である点、「南西の端」(つまり為信と右近の屋敷の近辺)が「国家の辺鄙に位置する大名」である点を指摘している。

<sup>62)</sup> 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告二〇一二—十七伏見城跡』2013年(3-5頁)に築城の経緯がまとめられている。

<sup>63)</sup> 「伏見城城下町は丘陵西麓を中心に町割が行われ、堀と土塁からなる惣構えで囲まれていた。惣構えは文禄3(1594)年秋には完成していたとされる。あわせて伏見港の整備や宇治川・巨椋池の改修も行われた。城下町には、武家屋敷が多数造営され、有力大名の屋敷は城郭周辺に集められた。町人の居住区は京町通、両替町通を中心に配置され、その西側には寺社が配置された。伏見城と城下町に関しては、近世に入ってから多くの絵画史料(絵図)が描かれている。」(同上5頁)

<sup>64)</sup> フロイスも、伏見城築城と城下町の武家屋敷について触れている。「(老関白)は都の町から二里距たったところ(伏見)に、きわめて豪華な建物を造営すべく一つの地所を選定した。そこで目下建築が進行中であるが、彼はすべての重立った武將たちに、同所に(各人が)屋敷を建てることを命じた。これは彼らに謀叛を企てる時間を持たせぬようにするために、それらの仕事に従事させることを望んだのである。」上掲『日本史2 豊臣秀吉篇II』(307頁)

<sup>65)</sup> 長谷川成一「伏見桃山城下の津軽家屋敷」新編弘前市史編集委員会編『市史ひろさき』第1号



によるイエズス会総長宛 1595 年 2 月 14 日付の書簡に、右近が一端冷え込んだ氏郷の信仰を甦らせたことが記されており<sup>70)</sup>、3 月 17 日（西暦）に亡くなるまで、右近が一ヵ月以上京都にいたことがわかる。この時点で、氏郷の屋敷が伏見に移っていたかどうか不明であるが、上記の絵図のうち為信の屋敷が位置する「伏見城の東側の端」の写真には、為信の屋敷の東側二軒目にひときわ広い「蒲生飛騨守氏郷」の屋敷が記載されている。

文禄 3（1594）年 4 月 7 日、秀吉が伏見の前田利家邸を訪問した際、すでに名護屋で秀吉との目通りを許されていた右近が、家臣団の一人として同席していたことが、日本側の史料で知られている<sup>71)</sup>。前田利家の伏見の屋敷は、すでにこの頃完成していたことがわかる。

同年の「春か夏」<sup>72)</sup>、右近の父ダリオが亡くなった。右近が文禄 2 年に名護屋から戻った際、父ダリオは病に伏していた。右近は、北国の寒さを避け名医に見てもらうように、父ダリオを都に移したのである<sup>73)</sup>。フロイスによると、父

ダリオは伏見の右近の屋敷とは別の場所「ミヤコの近く」で臨終を迎えたが、その時、右近らが立ち会っていた。また遺骸は右近の屋敷の中庭に仮埋葬された後、数ヶ月後に長崎へ運ばれたとされる<sup>74)</sup>。この屋敷は伏見の城下のものであったかもしれない。なお、文禄 4（1595）年 11 月 3 日に、右近は伏見の前田邸で開かれた茶会に参加している<sup>75)</sup>。

同じ時期に為信が上洛した時期は明らかではないが、伏見の屋敷への移転や参勤など、諸々の機会があったことは確かであろう。慶長元年から始まる木幡山城の築城に際しては、奥羽の諸大名が作事板の運上を命じられており、同年に津軽藩も杉板を廻漕している<sup>76)</sup>。いずれにしても、伏見城下で為信と右近が隣接する屋敷に居住していたことは、両者の決定的な接点ということができよう<sup>77)</sup>。

---

がにいる上に、土地の気候はもっと穏やかであり、とりわけそこには司祭たちがいるので、病気が重くなった時には最期を見てもらえるからであった。こうして（ダリオ）は、その同じ司祭といっしょに都に赴いた。すでに高齢であり衰弱しているので、その健康が案ぜられるものの、今は（都）でやや小康を保っている。」（上掲『日本史 12 西九州篇 IV』254 頁）

<sup>74)</sup> 上掲 H. チースリク『高山右近史話』（287-288 頁）にある 1595 年 9 月 30 日付のフロイスの書簡を参照。

<sup>75)</sup> 「一五九五年の後半、右近はやはり京都にいらしい。とにかく、同年十二月三日（文禄四年十一月三日）、前田邸で開かれた豪華な茶会に高山南坊も参加していた。」上掲 H. チースリク『高山右近史話』（271 頁）

<sup>76)</sup> 伏見築城をめぐる奥羽大名に課せられた普請や杉板の賦課については、上掲『新編弘前市史 通史編 2（近世 1）』80-92 頁に詳しい。

<sup>77)</sup> ちなみに上記の絵図によると、「伏見城の東側の端」に位置する為信の屋敷の正面向かいには、「京極若狭守」の屋敷がある。京極若狭守とは、キリシタンの京極高吉と京極マリアの長男で、やはりキリシタンとなった京極高次である。高次は、本能寺の変で明智光秀側についたが赦免され、天正 18（1590）年に小田原で軍功を上げ、近江八幡山城主となり、ついで文禄 4（1595）年に近江大津城主、関ヶ原の戦いの後に若狭の小浜城主となった。彼が受洗したのは慶長 2（1601）年とされる。上掲 結城了悟『キリシタンになった大名』（292-298 頁）を参照。また高次の弟、京極高知は、秀吉に仕えて文禄 2（1593）

<sup>70)</sup> 「（高山）ジュスト右近殿は、この（蒲生）レオンとは、不断に往き来していた。なぜならすでに長い間、彼らは互いに非常に緊密に結ばれていたからであるが、それは彼（右近殿）は（蒲生レオン）がキリシタンになるようにした人だからであった。そして現在（高山）ジュスト（右近殿）は、彼（蒲生レオン）がキリシタンの洗礼を授かった時に活動したように、それと同じ最初の状態に彼を戻そうと努力している。…中略…（高山）ジュスト右近殿が喜色満面で小躍りしながら馳せつけて来てこう伝えた。（蒲生）飛騨（守）殿は信仰のことで、新たに死から生命へ甦った人間のようなのである。」（上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第 I 期第 2 巻』41-42 頁）

<sup>71)</sup> 上掲『高山右近 キリシタン大名への新視点』（79 頁）によると、「豊太閤前田邸御成記」（内題）加賀之中納言へ御成之事」に同席した家臣二十二名の献上品が列記され、その上から六番目に高山右近の名がある。

<sup>72)</sup> 上掲 H. チースリク『高山右近史話』（287 頁）

<sup>73)</sup> 「…ダリオの病気は長引きするばかりであった。またその国は雪が多く寒気（が厳しい）ために、彼の身体によくなかったので、（ダリオ自身）にも、右近殿にも、（ダリオが）健康上、都に行って養生するほうがよいと思われた。都には名医

先に挙げた最後の検証項目、④問題の記述から為信のキリスト教接近と信牧の受洗について報告された1596年に至る約五年間における為信と右近の接点について、ここまで名護屋と伏見のケースを検証した。

## おわりに

本研究では、津軽為信のキリスト教接近の次第について、その「契機」と「動機」を中心に考察した。主要な先行研究において「契機」と「動機」に関する論究は見出されなかったが、検証を要する二つの点について示唆を得た。ひとつは、為信のキリスト教接近の「動機」として、南部氏をめぐる「怨霊」の存在が指摘された点である。本稿（前号）では「怨霊」がどのような結果を及ぼすことが見込まれていたかについて、当時の現世利益的な宗教観をもとに検証した。当時、津軽藩と南部藩の間で、過去の因果をめぐる戦争に発展する可能性は、もはやありえなかった。南部藩も津軽藩も、1590（天正18）年の奥州仕置により、領地と領主の地位が確定してからは、中央政権に組み込まれた。秀吉は全国統一に際して、各地での私的な領土紛争を禁止する「惣無事令」を下しており、私怨による戦は、領地と地位の剥奪につながりかねない非現実的なことであった。しがたって、為信を悩ませた南部氏の「怨霊」による悪果は、直接的な戦争状態とはいえない。ただし「怨霊」は現実世界との因果関係を持ち、実際に様々な悪しき物理的現象をもたらす根源として意識さ

れており、津軽氏が南部氏の「怨霊」が、「天災」や「家臣の反逆」などの災難をもたらす要因と捉えていたという点も見出された。為信が当時の武士の一人として、現世利益を希求する呪術的な宗教観のなかに生きていたことを考慮すると、南部氏の「怨霊」に対する畏怖が、キリスト教接近のひとつの要因であったと見ることはあながち間違いではないであろう。為信にとっての「救済」は、現実に関わりうる「天災」や「反逆」などの不幸を免れることであり、極めて現世利益的な希求であったと考えられる。ところで、現世利益的信仰は、効力を求める。京都や大阪では、著名な医師や上級武士の間にキリスト教が受け入れられ、その優れた効力が人々の話題にのぼっていた。宣教師も身分の高い人々の改宗に熱心であった。このような環境条件も、為信のキリスト教への接近を後押ししたと考えられる。

先行研究の検証を通して浮かび上がったもうひとつの検討事項は、「契機」に関するものである。フロイスは1591年度の年報でイエズス会日本巡察師ヴァリニャーノが、インド副王の使節として天正遣欧少年使節を伴い、都で秀吉と謁見したことを報告しているが、そこには高山右近を通じて説教を聴くことを求めた人物の一人が「奥州の大名」と記されている。津軽氏とキリシタンをめぐるのは、従来1596年と1607年のイエズス会年報に依拠して語られてきた。1591年度の年報（及び同内容の『日本史』）に見られる「奥州の大名」に関する記述が、津軽為信のキリスト教接近の契機を示すものとの見通しを、本稿では、ヴァリニャーノ、高山右近、ヴィセンテ修道士との時間的空間的な関わりを通して検証した。その結果、「奥州の大名」が為信であるとの確たる論拠は見出されなかった。とはいえ矛盾する史実も見出されず、かえってその蓋然性を高めるいくつかの事項が確認された。要約すると、①ヴァリニャーノがインド副王の使節として大坂、京都に滞在し、彼を訪問する多くの大名を右近が取り持っていた時

年に信濃の飯田城主となった大名であり、高次より早く慶長元（1596）年に受洗している。この年のフロイスの報告では、京極高知は、精力的に知人をキリスト教へ誘っており（上掲『十六・七世紀イエズス会日本報告集第1期第2巻』226-228頁）、兄高次が近く受洗することも示唆されている。「五歳内でもっともすぐれたものの中に入り、都から三、四里隔った大津という城の武将である彼の兄（京極高次）は、近いうちに自分の意向によってキリシタンになるであろうと我らは大いに希望を寄せている。」（同書228頁）

期に、為信も入洛していたこと、② 右近を通じて「奥州の国の大名」はヴィセンテ修道士の説教を聞いたが、この修道士は1596年年報において以前為信に説教した人物として名が挙がっていること、③ 名護屋在陣中に為信と右近は狭い空間で一年以上過ごしており、為信は右近が仕える前田利家とのつきあいに臨んでいたこと、④ 伏見城下の為信の一軒の屋敷が、右近の屋敷と隣接していたこと、である。このことから、少なくとも文禄から慶長年間に、為信と右近が接触した可能性が十分にあったことが明らかになった。

為信のキリスト教接近を伝える年報が書かれた1596年秋には、サン・フェリペ号事件がおり、翌年の長崎二十六聖人の殉教へとつながっていった。為信が受洗に至らなかったのは、おそらくこの事件を機に、秀吉のキリスト教禁令の態度が明確になったからであろう。為信は受洗した長男信牧と同じ慶長12年に59歳で亡くなり、右近は慶長19年の禁教令でマニラへ追放され翌年63歳で亡くなった。秀吉の死、関ヶ原、徳川政権の成立をとともに経験した為信と右近は、互いの屋敷が隣接する伏見城下で顔を合わせた時、果たしてどのような挨拶をかわしたのだろうか。

#### 引用・参考文献一覧

- 青森県編『青森県史（一）』歴史図書社 昭和46年  
青森県史編さん近現代部会編『青森県史資料編 近現代Ⅰ』青森県 2002年  
石戸谷正司「津軽諸侯とキリシタン」『弘前大学 國史研究』12号 弘前大学 1958年  
稲垣良典『習慣の哲学』創文社 1981年  
今村義孝他『切支丹風土記 東日本編』宝文館 昭和35年  
浦川和三郎『東北キリシタン史』日本学術振興会 昭和32年  
ヴァリニャーノ／松田毅一訳『日本巡察記』（東洋文庫229）平凡社 1973年

- 海老沢有道『高山右近』吉川弘文館 平成8年  
大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣 1988年  
岡田章雄『キリシタン大名』教育社 1977年  
オルファネル／井手勝美訳、ホセ・デルガド・ガルシア注『日本キリシタン教会史』有松堂書店 昭和52年  
片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』時事通信社 昭和54年  
小館衷三『津軽藩政時代に於ける生活と宗教』津軽書房 昭和48年  
五野井隆史『徳川初期キリシタン史研究』吉川弘文館 1983年  
五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館 1990年  
五野井隆史「キリシタンの信仰と迫害」『キリスト教文化研究所紀要』25-1号 聖トマス大学キリスト教文化研究所 2010年  
五野井隆史「16・7世紀、蝦夷情報とキリシタン」『サビエンチア：英知大学論叢』四十八号 聖トマス大学 2014年  
小林清治『奥州仕置と豊臣政権』吉川弘文館 2003年  
財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告二〇一二-十七 伏見城跡』2013年  
ミカエル・シュタイシェン／吉田小五郎訳『キリシタン大名』乾元社 昭和27年  
「新編弘前市史」編纂委員会編 虎尾俊哉監修『新編弘前市史 資料編2（近世編1）』弘前市市長公室企画課 平成8年  
「新編弘前市史」編纂委員会編 虎尾俊哉監修『新編弘前市史 通史編2（近世1）』弘前市市長公室企画課 平成14年  
菅野義之助著・及川大溪補訂『奥羽切支丹史』佼成出版社 昭和49年  
曾根原理「『御郷家深秘録』の諸本 附翻刻」『神道古典研究所紀要（6）』神道大系編纂会 2000年  
高木一雄『東北のキリシタン殉教地をゆく』聖母の騎士社 2001年  
高橋克彦『天を衝く 秀吉に喧嘩を売った男・九戸政実（上・下）』講談社 2001年  
H・チースリク『北方探検記』吉川弘文館 昭和

- 37 年
- H・チースリク『キリシタン史考』聖母の騎士社 1995 年
- H・チースリク『高山右近史話』聖母の騎士社 1995 年
- H・チースリク著／高祖敏明監修『キリシタン時代の日本人司祭』（キリシタン研究第四十一輯）教文館 2004 年
- 鎮西町史編纂委員会編『太閤秀吉と名護屋城』鎮西町 平成 5 年
- 土井忠生『吉利支丹文献考』三省堂 昭和 38 年
- Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I-II, q. 49-q. 54.
- トマス・アクィナス／稲垣良典訳『神学大全』第十一冊（第二－一部四十九－七十問題）創文社 1980 年
- 七宮淳三『陸奥南部一族』新人物往来社 昭和 62 年
- 中山裕樹編『高山右近 キリシタン大名への新視点』宮帯出版社 2014 年
- 西村貞『キリシタンと茶道』全国書房 1948 年
- レオン・パジェス／クリセル神父校閲・吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史』（全三冊）岩波文庫 昭和 13 年, 15 年
- 長谷川成一編『津軽藩の基礎的研究』国書刊行会 昭和 59 年
- 長谷川成一編『北奥地域史の研究：北からの視点 I 十六世紀末～十八世紀における支配と農政』名著出版 1988 年
- 長谷川成一『近世国家と東北大名』吉川弘文館 平成 10 年
- 長谷川成一「伏見桃山城下の津軽家屋敷」新編弘前市史編集委員会編『市史ひろさき』第 1 号 弘前市市長公室企画課 平成 13 年
- 長谷川成一「奥羽大名の肥前名護屋在陣に関する新史料について一文禄二年五月「誓紙一卷」の紹介と若干の考察」新編弘前市史編集委員会編『市史ひろさき』第 10 号 平成 13 年 弘前市企画部企画課
- ルイス・フロイス／木下空太郎訳『日本書翰：一五九一至一五九二年』第一書房 1931 年
- ルイス・フロイス／松田毅一・川崎桃太訳『日本史 1 豊臣秀吉篇 I』中央公論社 昭和 52 年
- ルイス・フロイス／松田毅一・川崎桃太訳『日本史 2 豊臣秀吉篇 II』中央公論社 昭和 52 年
- ルイス・フロイス／松田毅一・川崎桃太訳『日本史 4 五畿内篇 II』中央公論社 昭和 53 年
- ルイス・フロイス／松田毅一・川崎桃太訳『日本史 5 五畿内篇 III』中央公論社 昭和 53 年
- ルイス・フロイス／松田毅一・川崎桃太訳『日本史 12 西九州篇 IV』中央公論社 昭和 57 年
- ルイス・フロイス／松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史 1 將軍義輝の最期および自由都市堺 織田信長篇 I』中央公論社 2010 年
- ルイス・フロイス／松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史 12 キリシタン弾圧と信仰の決意 大村純忠・有馬晴信篇 IV』中央公論社 2010 年
- 本田伸『弘前の藩（シリーズ藩物語）』現代書館 2008 年
- 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集第 I 期第 1 巻』同朋舎出版 1987 年
- 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集第 I 期第 5 巻』同朋舎出版 1988 年
- 松田毅一訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第 II 期第 2 巻』同朋社出版 1996 年
- 松田毅一訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第 III 期第 5 巻』同朋社出版 1992 年
- 松野武雄「津軽の切支丹」『キリシタン迫害と殉教の記録（下巻）』フリープレス 2010 年（復刻版）
- 松森永祐「津軽切支丹の一考察」『弘前大学國史研究』13 号 弘前大学國史研究会 1958 年
- 宮崎憲太郎「日本人のキリスト教受容とその理解」『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター 1998 年
- 宮崎憲太郎「生活宗教としてのキリシタン信仰」『宗教研究』第七十七巻第二輯 日本宗教学会 2003 年
- 村井早苗「蝦夷島におけるキリシタン禁制—津軽キリシタン史との関連を中心に—」弘前学院大学地域総合文化研究所編『地域学 4』北方新社 2002 年
- 盛田稔・長谷川成一編著『弘前の文化財 津軽藩初期文書集成—国立史料館蔵津軽家文書—』弘前市教員委員会 昭和 63 年
- ベドゥロ・モレホン／佐久間正訳『日本殉教録』中央出版社 昭和 49 年



ペドゥロ・モレホン／野間一正・佐久間正訳『続  
日本殉教録』中央出版社 昭和 48 年  
結城了悟『キリシタンになった大名』聖母の騎  
士社 1999 年

吉田小五郎『キリシタン大名』至文堂 昭和 29 年  
デルカ・レンゾ「高山右近と当時の処刑・殺害  
概念について」『カトリック研究』81 号 上智  
大学神学会 2012 年